



中世の華黄金テンペラ画

—石原靖夫の復元模写

チェンニーノ・チェンニーニ『絵画術の書』を巡る旅

Il Libro dell'Arte



石原靖夫 復元模写《シモーネ・マルティエーニ〈受胎告知〉》1972-78年 卵黄テンペラ、金箔・板 / 226.0×171.0×11.5cm
金沢美術工芸大学蔵(原画=1333年/ウフィツィ美術館蔵) 撮影:歌田真介/1978年

「テンペラ画」

は、中世の絵画技法で、現在日本では、顔料を卵黄で練った絵具で描いた絵画のことを表します。中世のイタリアでは、絵画は宗教とかわりかかわりが深く、絵に光を与え輝かせるために、金箔と絵具を組み合わせ、装飾的な刻印など工芸的な技法が施されたテンペラ画へと発展していきました。

石原靖夫は、この魅力的な古典技法を今に伝える日本を代表する画家です。東京藝術大学を卒業後、1970年にイタリア・ローマに渡りローマ国立中央修復研究所に在籍して、さまざまな絵画に出会い、黄金背景のテンペラ画の技法の研究に打ち込みます。そして、1972年から帰国する78年まで、6年をかけて、ゴシック期シエナ派の画

目黒

区美術館では、1992年「色の博物誌・青い永遠なる魅力」展において、本作品を紹介

介し、以来、石原による、テンペラ画制作や絵具づくりのワークショップを継続的に開催し、古典技法への旅を共に続けてきました。

石原

が、自身の制作と目黒区美術館でのワークショップ、そしてさまざまな指導の場において教本として大切にしてきたのが、14世紀の画家チェンニーノ・チェンニーニが著した『Il Libro dell' Arte』です。これは、ジョット・ディ・ボンドーネに代表される当時の工房で代々伝えられてきた絵画技法が詳細に記されています。



本展

では、日本の美術館では展示されないことのない卵黄テンペラ画を、技法・色材・材料の面から紹介していきます。6年の歳月をかけて完成した、復元模写《シモーネ・マルティエーニ〈受胎告知〉》を中心に、当時、制作に使用した道具、材料、入念に調べた研究ノートなどの周辺資料を展示します。さらに、その後の研究をもとに、今回新たに手がけた「制作工程」と、同時に収録した手順の動画で、テンペラ画制作の過程を紐解いていきます。本展において、テンペラ画の基礎から金箔置き、刻印、彩色、緑土を用いる肌の描写、羊皮紙についての表現など、『チェンニーノ・チェンニーニ絵画術の書』が伝える技法を引用しつつ、それに石原の解説を加えながら紹介し、テンペラ画の魅力に迫ります。

る歴史的な文献で、美術史家辻茂により『チェンニーノ・チェンニーニ絵画術の書』(岩波書店/1991年)として長い年月をかけて丁寧に翻訳され、日本語で読むことが可能です。石原は、イタリア美術史家の望月一史とともにこの翻訳に加わりました。





テンペラとは

現在日本では、主に卵黄で顔料を練った絵具で描く技法や絵画のことをさしています。テンペラ (tempera) は、ラテン語の temperare (かき混ぜる) から派生したイタリア語で、絵画においては結合剤、または粉末の顔料にそれを練り合わせる、という意味を持ち、18世紀頃までは卵以外にも、膠、アラ



石原靖夫
(1943—)
東京藝術大学油画科を卒業後、1970年9月、イタリア政府給費生として渡伊。ローマ国立中央修復研

ピアゴム、カゼインなどで顔料を練った水性絵具の総称として用いられていました。テンペラ画は、フレスコ(壁画)と同様に古くからあり、特に中世の写本やルネサンス期にかけての板絵祭壇画などに優れた作品が多く見られます。卵黄テンペラは乾きが速く、耐久性に富み、明るく鮮やかな色を発し、また油彩や膠とは異なる接着特性があります。それゆえ金箔と卵黄との組み合わせにより、多くの装飾技法が生み出されました。

究所でジュリアーノ・バルディ教授に師事し、シエナ派の黄金テンペラを研究。1972年からローマの国立古典絵画館客員として、シモーネ・マルティエーニ作《受胎告知》(1333年)の復元研究模写を行いました。1978年に帰国し、東京都美術館、京都の日本イタリア会館で同作品を公

開。現在は、テンペラ画の普及に努め、テンペラ技法によりイタリアの風景をテーマに、個展を中心に発表を続けています。

『絵画術の書』
Il Libro dell'Arte
Cennino Cennini
1400年頃にチェンニーノ・チェンニーニがイタリアの工房に代々伝えられてきた絵画技法をまとめた手引書ですが、その手稿は現存せず、幾つかの写本が今に残されています。書籍としては1821年にイタリアで出版されたものが最も早く、日本では、同書のフランス語訳(1885年刊の1911年改訂版・ルノワールの序文付)を画家の中村彝が翻訳を試み、1964年に中央公論美術出版より出版された『藝術の書』が最初でした。その後、1991年に岩波書店の『チェンニーノ・チェンニーニ 絵画術の書』が刊行されます。本書は美術史家の辻茂が、その技法研究において、長い年月をかけた日本語訳として完成させたもので、巻末には、緻密な調査による詳細な用語解説が付されています。石原は、画家として技法の面から、イタリア語に精通する美術史家望月一史とともに本書の翻訳作業に関わりました。

本展では、原典 Il Libro dell'Arte の訳語を辻茂編訳の書籍タイトルから『絵画術の書』としました。

【画像について】
①石原靖夫 工程見本「シモーネ・マルティエーニ《受胎告知》部分 聖母マリア」17工程 / 石膏下地、卵黄テンペラ、金箔・板 / 各27.3×22.0cm 工程1 [下絵]→工程2 [金箔を置く]→工程3 [刻印装飾]→工程4 [グラフィート]→工程5 [彩色]→工程6 [肌を描く]→工程7 [仕上げ]
②メノウ棒 / 刻印タガネ / コンパス / リス毛筆 / 金泥
③「画材の引き出し博物館—練り剤による色味の違い」/ 「画材の引き出し博物館—西洋の色材:14・15世紀イタリアの色」/ ボーロの塊 / ローズマダー(顔料)
④石原靖夫《イタリア・ルネサンス期テンペラ装飾標本》1971年頃 / 卵黄テンペラ、金箔・板 / 42.5×65.5cm / 東京藝術大学蔵
ルネサンス期の絵画や額に使われた装飾技法29種を一枚の板にまとめた標本。
⑤〜⑧部分拡大: 石原靖夫 復元模写《シモーネ・マルティエーニ《受胎告知》》1972-78年 / 卵黄テンペラ、金箔・板 / 226.0×171.0×11.5cm / 金沢美術工芸大学蔵 (原画=1333年 / ウフィツィ美術館蔵) 撮影:歌田真介 / 1978年
⑨『チェンニーノ・チェンニーニ 絵画術の書』辻茂 編訳、石原靖夫・望月一史 訳 / 岩波書店、1991年
⑩金箔、箔刷毛
⑪ラピスラズリ



●関連催事
会期中、本展関連催事として、講演会ほかを予定しています。

●同時開催
ワークショップ2025 春
〈古典技法への旅〉
土日を中心に、展覧会に関連したワークショップを開催します。「画材の実験室」、「オンラインで美術館」も予定しています。

詳細、参加申込方法等は当館ウェブサイトでご確認ください。

公式 SNS
当館サイト

※当館には来館者専用の駐車場はありませんので、電車・バスなど公共交通機関をご利用ください。
※車でお越しの場合は隣接の目黒区民センターの駐車場(有料)をご利用ください。